



Subaru

男声合唱団

ニュース726

'20. 2. 25

「大阪のうたごえ祭典2020」開催！ -手をとろう とともに歌おう みんなの笑顔 が咲くまちへ-

2月23日



「群青 -福島に想いを寄せて-」400名の大合唱 指揮：山本恵造 ピアノ：門 万沙子

□ 2月23日（日）13：00～16：00「フェニーチェ堺」大ホールにて、「大阪のうたごえ祭典2020-手をとろう とともに歌おう みんなの笑顔が咲くまちへ」（大阪うたごえ協議会主催）が開催されました。

1,000名余りの大阪のうたごえの仲間・合唱団・合唱グループが集まり、「平和や幸せな暮らしを願う想い」を合唱曲に託し、合同で歌いかわし、1,000名以上の聴衆の皆さんに聴いていただきました。

「昂」は参加合唱団の一つとして、貴重な男声部門を担う合唱団として、準備段階から積極的に参加してきました。



当日も、9:00 集合で、オープニング曲「シヤハンバ」、混声合唱「君死にたまふことなかれ」、男声合唱「津軽平野」そして「人として」の合唱曲に、リハーサルでそれぞれ2回レッスンし、本番に臨みました。
なお、当日の昂メンバーの参加者は全32名でした。



3F客席で「シヤハンバ」オープニングを待つ！

13:00にオープニング曲「シヤハンバ」で演奏会は始まりました。昴は3F客席から、テナー伊藤さんのソロの雄叫び「SIYAHAMBA——」が大ホールに響きわたり、テナーの高音・山本宏司さんとのデュエット演奏が続き、その後を舞台の関西合唱団とPeace&Amuseの混声合唱に合わせて、昴も元気な声でうたいました。本並先生の指揮、森二三さんのピアノ。

「さあ 夢を 夢を 陽気に うたおうよー！」
「さあ 前へ 前へ みんなで進もうー 元気に
進もうよー！」

開催地・堺にちなみ、堺の歌人と謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」に堺市出身の新進気鋭の作曲家・石若雅弥さんの作曲・指揮で、200名近くの混声合唱が歌われました。昴は男声部を受け持ち、千秋さんのソロをはじめ、熱唱しました。

男声合唱「津軽平野」そして「人として」の合唱曲では、暗譜で歌うことのむつかしさを実感する舞台となりました。特に男声合唱曲「津軽平野」は、山下政雄さんの指揮でレッスンを数回重ねてきた馴染みの曲。本番での暗譜を約束したはずが、最後のレッスンで、まだうら覚えの部分がある！何とか最後まで歌えたものの、初演？の曲を暗譜で歌うことの危うさを再確認しました。（昴13回コンサートを間近かに控え、貴重な経験の場となりました。）

(投稿)

客席から見て聴いた大阪のうたごえ祭典 2020

中谷清一

「大阪のうたごえ祭典 2020」が今回、私の居住地(高石市)に隣接する堺市で開催されました。会場は、元の堺市民会館を昨年建替え・新装されたホール名「フェニーチェ堺」で開催されるということで、何の気なしに自宅にチラシを持ち帰り女房に話したところ、数年前に古くなった堺市民会館でコンサートに行ったことがあった女房は「フェニーチェ堺」という真新しいホールに行きたいということで、今回は出演を諦めて私も観客として女房に同行することになりました。そんな訳で客席から昴の皆様を拝見、舞台全体を見ることが出来たということもあり、私なりに感じたことをお送りすることにしました。

幸運にも私たち夫婦の座席は前列から7列目の19番・20番。舞台正面中央のS席の少し前という最高の席で聴くことが出来ました。

<全体の舞台構成>

まず、舞台構成全体について感じたことを一口で言えば、70年余にわたり育んできた草の根運動に裏打ちされたうたごえ仲間の演奏と、洗練された専門家(プロ演奏家)、そしてゲスト出演者が何の違和感もなく見事に調和された舞台を創りあげていたことでした。しかも、数百人規模の出演者の出入り・舞台展開も司会者の絶妙な進行でスムーズに流れプログラム全体が予定通りに進んだようです。休憩時間を挟んだ約2時間40分には、メッセージ性も織り交ぜての中味の濃い音楽会となり、それでいてしんどさや退屈感がまったく感じさせない素晴らしい祭典でした。このうたごえ祭典のために準備された表方、裏方、出演者、そしてすべての関係者の協力と団結の賜物と思います。うたごえ運動とはあまり縁のない女房も良い音楽会との評でした。

あえて欲を言えば、最後のエンディング曲「旅のはじまり」「どこかで春が」の2曲を会場と一体で歌えるような工夫があればさらに良かったように思いました。

<輝いた“昴”団員の存在感>

この祭典での“昴”の存在感をアピールしたのは、何ととってもオープニングでした。

吹き抜けの高い3階席から前ぶれなく伊藤さんのソロが始まる。それは遠い天空から聞こえてくるように広いホールに鳴り、そして山本宏司さんとのデュエットへ。3階席を見上げると真っ赤な

衣装の“昴”団員の姿が。舞台正面には前列に若者たちの軽快でのびやかなステップ、その後ろにはベテランの歌い手とジャンベ太鼓のリズムという祭典にふさわしい効果抜群のオープニングの演出でした。「シヤハンバ」を初めて聴いたお客さんにもインパクトがあったのではと思います。

あえてもう一つ挙げれば、堺市が生み出した歌人・与謝野晶子の詩に同じく堺市出身の石若雅弥が作曲した「きみ死にたまふことなかれ」の男声パートを“昴”団員がしっかり支えていたこと。数百人と思われる混声合唱でしたが、千秋さんのソロもよく響いていました。

<印象に残った舞台>

プログラム全体がすべて良かったのですが、あえて私の印象に残ったのを挙げるとすれば、地元の「堺すずめ踊り」と満9年を迎えようとしている福島県原発事故に遭遇した中で創られた「群青」でした。その中でも、「群青」という合唱曲は5～6年も前だろうか、私も地元の混声合唱団でテナーパートを歌ったのですが、まだまだこの日のような感動的な演奏にはほど遠い出来でした。この日の演奏は、ひとつひとつの言葉が胸に迫るとともに、数百人規模の編成による深みを創り出し、最後の Coder 部で P～PP へ。余韻を残した感動的な演奏でした。

最後に“昴”の皆様、ご苦労様でした。第13回コンサートに向けて健康に留意してさらに高みを目指しましょう。

13 コンサート曲「朝露」「道」「見上げてごらん」 「U Boj!」「ゆらゆら春」「死んだ男」

2月21日

□ 2月21日(金) 18:00～20:30 昴定例レッスンが開催されました。

佃さん体操、吉岡さんの滑舌訓練、千秋さんのヴォイストレーニングのあと、今日は13回コンサートで歌うメイン曲（聴かせどころの名曲）「朝露」「道」「見上げてごらん夜の星を」「U Boj!」「ゆらゆら春を」「死んだ男の残したものを」の6曲を、伊藤副指揮者の指揮でレッスンを行いました。ピアノ伴奏は森二三さん。参加者は全35名でした。



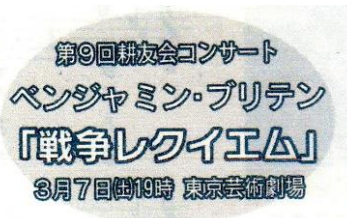
3面に「戦争レクエム」の記事が載っていましたが、57年前に歌った曲なんです。当時大阪労音の例会に行ったとき、合唱団の募集があり、歌えるかどうか解らなかったが、とにかく中之島中央公民館の練習場に6月中頃行きました。

1日目から4分の7拍子から練習が始まったのは驚きました。

「チエス イレ チエス イラ ソルベ セクル インファ ビラ」と出てきます。1時間20分の大曲で関西初演でした。会場はフェスティバルホール、大フィル。住吉少年少女合唱団との共演でした。演奏会は翌年の3月の中頃4回ぐらい演奏をしました。出来栄えが悪いため、残って練習させられ、外へ出ると大雪で電車が止まり、帰宅出来なかった人もいました。団員が250人いてその人たちを引き止めるため、年末第9演奏会を始めたのが、恒例の年末の第9演奏会の始まりなのです。

その後は、夏は「ベルチイ」「モーツァルト」などのレクエム、冬は第9演奏会が定着したのです。私は大阪第1合唱団・フロイデ合唱団に所属し、週2回の練習に行っていました。子供が双子でしたので、5年ほど合唱とは無縁の生活でしたが、今に至ります。

【耕友会・笠江春香】戦争レクイエムは、第二次



2020.2.24 「うたごえ新聞」

世界大戦の悲劇を想って描かれた壮大な反戦のレクイエムとなっています。Britten (1913-1976) 今回のプロジェクトは、私共の耕友会ここ10年の集大成ともいえるべきコンサートで、2000人の合唱、1000人のオーケストラ、100人のオペラ歌手(チェンバロ、オケと大オケのダブル・オーケストラ)、各民と一流ソリストを携えた超大編成です。



今こそ、歌いたい、歌わなければ

この作品は、その編成の大きさからなかなか演奏されることも少なく、加えて合唱団が主催すること自体がとても希少であります。また、オーケストラがジョー・ピグネリスに選ぶ演目ではなく、マエストロと合唱団が平和を訴えるために一流のプロを雇って行うには予算規模も大きくリスキーな演目だからです。それでも私たちはこの演目を3年に一度演奏したいと考えました。実際に第二次世界大戦を経験した世代の方が世を去りなくなりつつあり、また無人戦闘機が遠隔で人を殺してしまう時代だからこそ、一人でも多くの方にお聞きいただきたいと切に願っております。今回は、山田和樹氏が芸術監督を務める「横浜シンフォニエッタ」のコーポとなり、指揮は耕友会の芸術監督「松下耕」が務めます。松下は日本を代表する合唱作曲家、合唱指揮者ですが、この作品は「合唱曲」なのだから、合唱指揮者が演奏すべきだとタクトを握ることを決めました。また、合唱には台湾から「台北ユースクワイア」、児童合唱には我々の仲間である「みなみ野キッズシンガーズ」/「佐倉ジュニア合唱団」が加わります。SS1万5千5百円。上記サイトまたは、042・786・6517

この作品は、その編成の大きさからなかなか演奏されることも少なく、加えて合唱団が主催すること自体がとても希少であります。また、オーケストラがジョー・ピグネリスに選ぶ演目ではなく、マエストロと合唱団が平和を訴えるために一流のプロを雇って行うには予算規模も大きくリスキーな演目だからです。それでも私たちはこの演目を3年に一度演奏したいと考えました。実際に第二次世界大戦を経験した世代の方が世を去りなくなりつつあり、また無人戦闘機が遠隔で人を殺してしまう時代だからこそ、一人でも多くの方にお聞きいただきたいと切に願っております。今回は、山田和樹氏が芸術監督を務める「横浜シンフォニエッタ」のコーポとなり、指揮は耕友会の芸術監督「松下耕」が務めます。松下は日本を代表する合唱作曲家、合唱指揮者ですが、この作品は「合唱曲」なのだから、合唱指揮者が演奏すべきだとタクトを握ることを決めました。また、合唱には台湾から「台北ユースクワイア」、児童合唱には我々の仲間である「みなみ野キッズシンガーズ」/「佐倉ジュニア合唱団」が加わります。SS1万5千5百円。上記サイトまたは、042・786・6517